

る諸徳を養ひ、以て自分のつとめを全ふしおつとにたいしては留守中の任務を遂行したのである。

かくの如きは良妻賢母といふてもはづかしくあるまい、かくの如き心がけは一般世のお母さんたちに望みたいことであります、しておつとが多年遠く外國にあるとか、又はいろ／＼の事情のために家にあることのできない家庭においてはなをさら一そーその心がけが大切であるとおもいます。

偉人の學校時代 (三)

グレンサム及びケムブリヂに於ける

ニュートン (承前) 米 深

ニュートン又、鉛筆畫の妙手となりぬ。蓋し皆木炭を以て、家の壁に練習せしものにて、之か爲壁は、其の考によりて描きたる形の痕跡、模様、

生物、形象、線等を以て充さる。而して肖像の内には、チャールス一世、ドグナル、ドン、及びグレンサム校に於て師事せしズトグ等の頭首あり又禽獸、人類、船舶、其の他數理上の表式等、雜然たるを見る。此の壁、千七百十一年、其の家の破壊せらるゝ迄は存せりき。

ニュートン又特に、詩句を作るに卓越せることは、世自から定評あるも、今に至つて、斷翰零墨も、確然之を徵すべきもの存するなし。而して彼は、晩年屢々、自から其の詩を好まざることを説けり

ニュートン、十五歳に達するや、母の園圃の小作事務に任ずるが爲に、グレンサムの學校より、家に呼び還され、其の後屢々、穀物其の他の農産物賣却の事に従ひ、グレンサムの市場に送られしが

彼は大抵、之を其の伴ふ所の老僕に托し、己は先づ、嘗て自から樂みたる、書籍の包みを藏せる樓上に至り、其の包装を探りて後、身をウールソーブとグランサムの間の路傍に潜め、老僕の市場より歸り來る迄は、書見に耽るを常とせり。

是に於て、其の母之を牧場に送り、羊及び牧畜を監せしむ、然れども、ニュートンは、概ね其の書冊を手にして、樹下に踞するにあらざれば、即ちナイフを以て摸型を刻するか、園圃の側、清流の涯りに在る、揺掛水車の回轉を凝視せり、

其の始めて科學的實驗をなせるは、實に千六百五十八年、大暴風の時にして、恰も、彼の、クロムウエル歿したる時にして、ニュートン、齡漸く十六歳に達せる折なりき。

偶々其の母、叔父と共にニュートンが東籬の下

に箕居して、數學上の問題を解せんとし、凝神世を忘るゝものあるに及び、其の、到底農圃の間に生を安んずるものにあらざるを知り、遂に再び、グランサムの學校に送り、後英の三大學の一なるケムブリッジに入學せしめぬ、之れ後にニュートンの天稟を發揮せしむる源泉を涵養せし所なり。

其の學校に在るや、サンダーソンの論理、ケプラーの光學の如き、講師の講話を俟たずして、早く既に、之を咀嚼し盡せるが如き、一千六百六十四年、慧星觀測に於て、最も其の不撓の精力を發揮せるが如き、又一千六百六十五年、微分法を發明せるが如き、園圃の間に在りて、梨の實の梢より墜下するを見て、遂に動の大法則を確立せるが如き、光學應用の第一着に於て、光線の三稜玻璃分解を會得せるが如きに至つては、到底、今之を

詳述する暇あらざるなり。

然りと雖ども、今此の傳を終るに臨み、此の偉人が、如何にして、斯くも偉大なる事業をなし、かに就て、遂に一言なきを得ず。

天の其の物を成す、決して偶然にわらず。一枝の花、一穎の實、豈徒爾ならんや。ニュートンの成功の如き、亦數の正に然らざるべからざるものゝつて存す、蓋し、其の天稟の賦性、自から卓越せるものありしに相違なしと雖ども、其をして益々光あらしめし所以のものは、其の堅忍不拔の志氣と、間斷なき考察の結果と相伴ふにわらずんば又期すべからざる所のみ。而して、ニュートンが發表せる、自己の其の勞役に付ての考察に至つては、識見卓抜、遠く世表に出で、自から異彩あるを見る、其の死に先だつ數時、語つて曰く、

「予何を以て世に知られしかを知らず、唯其の自から省みるに當りては、生涯の事、恰も海邊に在りて、時に波濤を潜つて、光澤異常の小石を索め或は珍奇の貝殻を探らんとして遊べる兒童の如くなりしのみ。此の間に於て、真理の大海は、自から前きに予の、發見せし所のものを給せるなり」と。

嗚呼之れ偉人謙讓の言なりと雖ども、之を聞て果して奈何の感をなす。漂渺の天地測るべからず、人智の透徹する所知るべきのみ。吁是眞に、竟に測るべからざるか。否々、勉むること己れに在り。(完)

河野清子嬢よりの書狀

左の書面は、前に安井氏と共に暹羅に渡りたる